



## 馬 耳 東 風

令和になって最初の正月は太陽が輝き平穏な幕開けとなった。このまま、平和で災害のない年になってほしいものだと願っていたが、1月3日、米国がイラン革命防衛隊ソレイマニ司令官を殺害したことが発端となり両国間の緊張が一段と高まった。両国間の軋轢は常に中東情勢の不安定化に影を落としているが、双方がそれぞれの正当性を主張しており容易には解決しそうにない。振り返れば、2001.9.11後、米大統領は核の脅威を理由に掲げて攻撃を正当化しようとした。当時、タイム誌の実施した世論調査でも、欧州の8割の回答者が「米国脅威論」が強くなった旨の見解を示した。(MIT教授チョムスキー著「覇権か、生存か」)。約19年経った今、同じような事が起こっている。新年早々、物騒な話題になってしまったが、常々念頭にあるのは、希望を抱き語れる平和な社会になって欲しい、子ども達に真に豊かな社会を残したいということである。しかし、時代は好転してこない。

話題は変わるが、2008年に蕪崎の大村美術館を初めて訪れた。この美術館は、ノーベル賞受賞者の大村 智氏によって2007年に設立されたもので、翌年には故郷への恩返しとして作品を含めて蕪崎市に寄贈された。美術館の規模は小さいが小倉遊亀、三岸節子、片岡球子など女性画家の小品を中心とした質の高い作品が展示され

ており、季節ごとに展示替えが行われている。昨年も2度訪れたが、大村氏の絵画に対する造詣の深さに感心させられ、至福の時間にどっぷりと浸ることができた。大村氏は美術好きの母親の影響で美術に関心を持ち、30代から絵画蒐集を始めたと述べている。蒐集された絵画は港区白金の北里研究所、大学あるいは北本市の北里メディカルセンター内にも多く展示されている。大村氏は1997年に女子美術大学の理事長に就任し、奥様の名を冠した「大村文子基金」を創設し、「女子美バリ賞」「女子美ミラノ賞」を設け、受賞者には1年間留学の副賞を付ける等、教育者として将来を担う若手画家の支援にも力を入れている(美術の窓2013 No. 361, 2015 No. 387)。また、女流画家協会展での「大村文子記念賞」を設ける等、大村氏の美術界における貢献度は非常に大きなものがあるという。蕪崎大村美術館の一角にある記念室には大村氏の学者としての膨大な輝かしい業績の歴史が展示されている。医学分野での国際的な貢献と同時に、教育者、経営者、そして美術品蒐集家として多くの人々に「健康・幸福」を贈り続けている。「実践躬行」を座右の銘として益々精力的に活躍されている大村 智氏は述べている「美は心の栄養、悩み苦しんでいるとき、あるいは精神が彷徨えるときなど、わたしはいつも美術品に触れることで、自分を見失わずにいられた気がします」と。

(青)